

□ 書評 □

斎藤清二(著)

「はじめての医療面接」

コミュニケーション技法とその学び方

神津忠彦

(東京女子医科大学医学教育学・消化器内科学教授)

対話は治療を構成する重要な要素のひとつである。医師を志す者はもちろんのこと、すでに長い間医師として診療に携わってきた者であっても、患者と向き合う場における自らの在り方を学び、振り返り、向上を求めて研鑽し続けることは、プロフェッショナルとしての義務であり、喜びでもある。

医学・科学技術・医療・社会が激しく変化する中で、日本でも医学教育改革が急ピッチで進んでいる。言うまでもなく、改革の主眼のひとつは良医の育成にある。知識偏重の伝授型教育から脱却し、医師に期待される臨床技能や、態度、習慣、考え方を身につけさせるための、バランスのとれた医学教育が模索されている。その中で医療面接に関する教育については、態度ばかりでなく、その根底にある心の在り方までも含んだ領域であるだけに、ともすれば教員にも学生にもある種の戸惑いを惹き起こしやすい。その意味で本書は、医療面接をめぐる学習を開始しようとする学生ばかりでなく、教育に携わる教員にとっても好適なガイドブックとして、生涯にわたる良き伴侶となるであろう。

日本では、医学部における医療面接教育の在り方をこのように体系的に明示した本は少ない。医療人教育に共通する「人間関係」教育に比重をおいた著述を見かけることはあるが、医師としての「役割関係」の側

面に関する視点をしっかりと掲げた書物はそう多くない。その理由は、医療面接の中で医師と看護婦との職業的役割の違いを明確には意識せず、看護介護領域の教育で重視される「心理カウンセリング」への傾斜がやや目立っているからかもしれない。

本書は医療面接教育におけるもどかしさのある程度払拭してくれる。医師患者関係の基本となる非言語的なコミュニケーションの意義や「受容」と「共感」について丁寧を解説した上で、この種の行動に影のように付きまとうマニュアル化した「偽物の共感」への陥穿を指摘し、医療面接が単なる技術教育ではなく、人間存在を根本的に問い直す、心の世界に深く立脚した全人的な教育行為であることに気づかせてくれる。その意味では近年我が国でも客観的臨床能力試験(objective structured clinical examination: OSCE=オスキー)が定着する中で、教員や学生にとって必読の書ではないかと思われる。

本書の行間には、すぐれた医師・研究者でもある著者が、教育者として成長する原動力となった人生哲学が読み取れる。いと高き存在を見つめながら医師患者関係の在り方を問い続けた心の遍歴の軌跡と言うこともできよう。

本書は「はじめての医療面接」と題されてはいるが、医学生ばかりでなく、すでに数年、十数年の臨床経験を経た医師にとっても、示されたひとつひとつの場面が実感をもって自身の過去の体験に重なり、日常の患者診療の在り方を自省しさらに改善するための大きな示唆を与えてくれるのではないかと思う。

● A5 頁144 図2 表1 2000

定価(本体 1,800 円+税) 送料実費 医学書院・刊